

## 盆の傘鉦 2

### —大分の庭入り—

段 上 達 雄

#### 【要 旨】

大分県北部の山間に分布する初盆供養の「庭入り」行事を紹介すると共にその分布の全体像を初めて明らかにした。また、庭入りの傘鉦の形態的差異を「花籠合体型傘鉦」「花籠分離型傘鉦（多段横竿式）」「花籠分離型傘鉦（多段輪式）」、その他に分類した。

#### 【キーワード】

傘鉦、庭入り、供養盆踊り、大分

#### はじめに

大分県の盂蘭盆会で用いられる傘鉦は、佐伯市米水津町宮野浦と同色利浦の事例を『盆の傘鉦 1』で紹介したが、この県南の海岸部のものとは系統の違う盆の傘鉦が、大分県の北部に分布する。それが「庭入り」と呼ばれる盆行事の傘鉦である。庭入りとは初盆の家のツボ（坪＝母屋の前庭）で行われる供養盆踊りである。この庭入りの時、踊り手たちの行列の先頭を傘鉦が進み、供養盆踊りの場で立てられる。大分県下では宇佐市安心院町・院内町から旧速見郡（日出町・杵築市山香町・由布市湯布院町を含む）の山間部に分布する。本来、近世村落などの集落単位で庭入り行事を行っていたが、現在はいくつかの集落が合同で実施しているところも多い。また、庭入りといっても、初盆の家のツボではなく、「寄せ踊り」といって、広場や校庭などに設けた祭壇に持ち寄った位牌を祀って、その前で踊るようになった所もある。

#### 1. 儀礼としての庭入り

「庭入り」の行事の次第を紹介する。庭入りは8月13日か14日の夜に初盆の家の坪で供養踊りを中心とした儀礼が行われる。

##### 齊藤の庭入り

宇佐市院内町齊藤の庭入りは8月13日の夜に行われる。齊藤地区は23戸（平成21年当時）の小集落であるが、庭入りを大切に伝承している。平成21年には4軒の初盆の家があり、40分刻みで庭入りをして廻った。午後7時50分頃から始め、終わったのは12時頃であった。昔、9軒ほど



写真1：斉藤の庭入りと傘鉦

初盆の家があったことがあり、その時には庭入りが終わったのは明け方近かったという。初盆の家は盆坪に笹を立て、その枝に謝礼の金一封の入った紙包みや手拭いを紙縊で吊り下げる。庭入りでは、まず最初に傘鉦が持ち込まれ、綱をかけて盆坪に立てる。同様に花籠も立てる。整然と行列を組んで初盆の家の盆坪に入場する。巻物読み（シカシカ）を先頭に、太鼓持ち1人、太鼓叩き1人、笛3人、持鈴1人、踊り手9人が続く（平成21年当時）。太鼓は桶胴（金属籬）の締め太鼓で、1人が大きな太鼓を肩に担ぎ、その後ろを歩く太鼓打ち1人が太鼓を叩く。斉藤の庭入りは男性だけで実施される。傘鉦に「斉藤若連中」と書かれているように、かつては青年団が庭入りを実施しており、女性は昔から参加できなかった。まず、全員で「御詠歌」

を唱えながら花傘を中心に時計廻りに静かに廻る。「御詠歌」は「ふるさとや はるばるここにきみいでら 花の都もちかくなるらん」「ちちははのめぐみもふかき こがはでら ほとけのちかいたのもしきかな」「みやまじゃ ひばらまつばら わけゆけば まきのおてらに こまどいさめる」の3種である。次に巻物読みが「東西南北（シカシカ）」を読み上げ、合いの手に太鼓が叩かれる。ここの「東西南北」の詞章は次のように簡潔である。「東西南北静まり給え、西も東も南も北も。どうかこの家の〇〇様の、御死去なされし供養の踊り。どうか一夜の庭（つぼ）借し給え、あれ、うれしや庭借りだした。老いも若きも姐さん方も、どっと一度にお手しやらしゃんと。一つ手を振りゃ千部の供養、二つ手を振りゃ万部の供養」続いて花籠を中心に盆踊りを踊る。音頭取りは黒い蛇の目傘を左手で持ちながら口説く。盆踊りは「五調子」「マカセ踊り」「け出し踊り」「レソウ踊り」などの口説きがある。盆踊りを終わると、行列を組んで退場し、傘鉦と花籠を次の家に運ぶ。斉藤地区の庭入りは男性だけで行うように、古い習わしを良く伝えている。旧院内町地域は伝統的な庭入りを伝えているところが多い。

#### 佐田の庭入り

宇佐市安心院町大字佐田では8月13日の夜に佐田小学校の校庭で寄せ踊りを行う。ここでは戦前の初盆の家で庭入りしていた頃の様子を紹介する<sup>(1)(2)</sup>。

夕方、暗くなって横笛の合図があると、集まって行列を組んだ。青年団長、太鼓、鉦、提灯（灯り持ち）、傘鉦の順に並び、その後ろに踊り手が2列に並んで初盆の家のツボ（内庭）に向かった。ミチビキ（導き）といって、初盆の家のカド（門＝屋敷の入口）から仏前までは1～3人の笛の音にあわせて進んだ。初盆の家では、仏壇前の提灯に灯りをつけて、新仏の位牌を縁側の中央に出した。それを中心に縁側に物故者の縁者が左右に座って、庭入りの一同を迎えた。「念仏申し」の後に笛が吹かれ、和讃となる。ツボの中央には置座と斗栱が置かれており、太鼓と鉦の先導で傘鉦とそれに続く行列が、置座を中心に時計廻りに2度巡り、ゆっくりと歩きながら和讃を唱えた。和讃が終わると、傘鉦は停止して行列の者たちは傘鉦の後ろに並んだまましゃがむ。巻物読みが位牌の前に立って「シカシカ」を唱える。和讃は物故者の年齢で違いがある。成人の場合は「地藏和讃」、子供の時は「花和讃」である。地区ごとに庭入りをしていた頃は、さらに細かく規定して、他の和讃を唱えていたところもあった。現在、佐田では「花和讃」を唱えるだけ

である。ゆるやかなテンポの太鼓と鉦にあわせて、先頭を行く若者が先導者となって哀調を帯びた最初の一節「そもそも都の」と唱える。それに続けて一同が二節目の「かたわらに」と合唱する。独唱と合唱を繰り返しながら和讃の詞を続けて唱え、最後に「南無阿弥陀仏」の独唱と合唱を二度繰り返すが、先導者はきちんと「南無阿弥陀仏」と唱えるが、一同は「南無阿弥陀」と唱えて「仏」を省略する。「シカシカ」では、提灯持ちの灯りで、巻物読みが巻物を読み上げる。一節ごとに太鼓打ちが太鼓を二度トントンと叩く。佐田のシカシカの詞を次に記す。

「東西東西、御静まり候えや（トントン）。御静まり候（トントン）。月にむらくも、花に風（トントン。以下略）。夕べの稲妻、朝顔の露。世は有為転変の、世の中とは申せども。老少不定は世のならい。ここにただしく御仏様。長々病の床にふし。医者、薬、肝胆尽せども。ついにその甲斐あらずして。はかなくこの世を去り給う。月かさなり、日かさなり。ついに初盆と、渡らせ給う。あまり初盆の、淋しさに。村の若い者、子ども。面白からん、バンバ踊りを。取り組みまして、ご座らば。いや待った、バンバ踊りとは。いわれなき、ことにてなし。そのいわれを申す、しばらくご免候えや。昔、天竺霊鷲山において。浄飯大王の御子に。釈迦如来と申す御仏あり。釈迦の御弟子目蓮尊者と申す僧あり。目蓮尊者の御母上様。喧噪邪見の到りにて。等活地獄に墮在し給う。この時、目蓮尊者大きに悲しみて。釈迦如来に告げたもう。釈迦如来に答えて曰く。日に百人の僧を寄せ。三界万霊に位牌をかずき。高さ九尺に柵をかけ。卯月五日より、文月十三日に到るまで。万度供養を勤めなば。地獄あがり宣言。この時、目蓮尊者大きによろこびて。三界万霊に位牌をかずき。高さ九尺に柵をかけ。百人の菩薩方。着たる浴衣を衣と表し。かぶりし笠を青葉と表し。手には蓮華の花を持ち。衣の袖を打ち振りて。バンバ、バンバと踊らせ給う。これが今が世に到るまで。笛のうたぐち、太鼓の根締め。鐘の音は諸行無常と響くらん。さあさあ用意ご座らば。さあさあ音頭始め候えや。音頭始め候」

「シカシカ」が終わると、男性だけの「バンバ踊り」となり、傘鉦を中心に初めて輪踊りとなる。音頭取りは置座に上がって唐傘をさして口説く。それに合わせて踊り手たちは「ヤーレンシヨ、ヤーレンシヨ」と掛け声をかける。ゆるやかで単調な念仏踊りである。バンバ踊りまでが庭入りの行事で、そのまま老若男女が参加する一般的な盆踊りとなる。「レソ」「マカセ」「ケダシ」「二ツ拍子」「三ツ拍子」「六拍子」「七拍子」「大津絵」などの盆踊りを踊った。最後に男性だけの激しい所作の「ケダシ」を踊って終わるのが、古い盆踊りの形であったという。



写真2：佐田の庭入りと傘鉦

## 2. 庭入りの分布

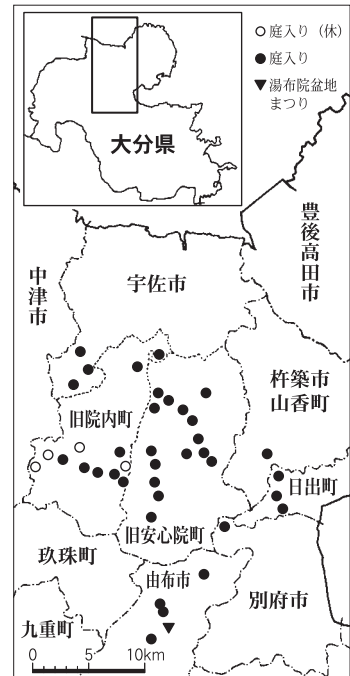
「庭入り」行事は宇佐市安心院町と同院内町などを中心に山間部に分布する。その分布の特色はすべて山間部に所在することで、宇佐市北方の海岸近くの平野部にはまったく無く、その痕跡すらない。

表1「傘鉾の出る庭入り」は現在確認できている「庭入り」行事をリスト化したものであるが、現在は傘鉾を出さない所、あるいは庭入り自身を最近休止した所も含めている。

別府市天間は駅館川の支流津房川の最上流部に位置し、安心院と別府の間地点にあたる集落で、庭入りは安心院から伝播してきたものと推測される。

庭入り行事の多くは13日と14日の夜に行われるため、すべての地区の庭入りを実地調査したわけではない。そのため、この表が未完成であることをお断りする。

杵築市山香町には昔は安心院町寄りの谷筋にかなりの集落で庭入りが行われていたという。1995年頃に山香町上河内の庭入りの調査をした頃には既に山香町内では数少ない行事になっていた。山香町に接する集落である日出町南畑や南端



図：庭入り分布図

表1 傘鉾の出る庭入り

集 落 名		庭入りの日	会 場 等	特記事項
宇佐市	麻生	8月14日	上麻生公民館で庭入り	寄せ踊り C
	中麻生	8月14日	中麻生公民館で庭入り	寄せ踊り C
	下麻生	8月14日	麻生地区活性化センターで庭入り	寄せ踊り C
宇佐市 院内町	下恵良	8月13日	初盆の家で庭入り	庭入り休止中
	温見 (a)	8月13日	初盆の家で庭入り	B 2
	斉藤	8月13日	初盆の家で庭入り	B 1
	東	8月13日	初盆の家で庭入り	2011年から休止中
	余上7集落(b)	8月13日	余神社横の運動公園で庭入り	寄せ踊り B 1
	下余	8月13日	初盆の家で庭入り	B 1
	月俣	8月13日	2004年から月俣集会所で庭入り	寄せ踊り B 2
	定別当	8月13日	初盆の家で庭入り	2008年から休止中 B 2
	大門	8月13日	初盆の家で庭入り	庭入り休止中
	小稲	8月13日	初盆の家で庭入り	庭入り休止中
	岳切	8月13日	初盆の家で庭入り	庭入り休止中
	上納地	8月13日か?	初盆の家で庭入り	庭入り休止中 B 1
広瀬	8月14日	初盆の家で庭入り	B 2	
香下	8月14日	初盆の家で庭入り	傘鉾休止中	
宇佐市 安心院地区	上荘・戸方	8月13日	初盆の家で庭入り	
	荘	8月13日	初盆の家で庭入り後、ゲートボール場で盆踊り	A
	下毛	8月14日	亀の井ホテル前で庭入り	寄せ踊り
	木裳	8月14日	木裳集会所前で庭入り	寄せ踊り

集 落 名		庭入りの日	会 場 等	特記事項	
宇 佐 市 安 心 院 町	安心院地区	折敷田	8月14日	正建寺で庭入り	寄せ踊り
		大口田	8月13日	初盆の家で庭入り後、公民館広場で盆踊り	
	津房地区	六郎丸	8月13日	研修センターで庭入り	寄せ踊り A
		松 本	8月13日	初盆の家で庭入り	
		尾 立	8月13日	公民館前で庭入り	寄せ踊り C
		榎 本	8月14日	榎本公民館前で庭入り	寄せ踊り
	深見地区	中 央 (c)	8月13日	生活改善センター前で庭入り	寄せ踊り C
		大 和 (d)	8月13日	しろばと保育園で庭入り	寄せ踊り
		鷹 声 (e)	8月13日	鷹声グラウンドで庭入り	寄せ踊り
		中 山	8月13日	初盆の家で庭入り	
筈ノ口 (f)		8月14日	筈ノ口公民館で庭入り	寄せ踊り	
南 香 (g)		8月14日	深見小学校富貴野分校校庭で庭入り	寄せ踊り C	
四連区 (h)		8月14日	剣星寺で庭入り	寄せ踊り	
	鳥 越	8月14日	鳥越公民館前の広場で庭入り	寄せ踊り	
	佐田地区 (i)	8月13日	佐田小学校校庭で庭入り	寄せ踊り A	
別府市	天 間	8月13～14日	13日は初盆の家、14日は正円寺で庭入り	2011年から休止中 A	
由 布 市	湯布院町塚原	8月13日	初盆の家で庭入り・塚原小学校で盆踊り	A	
	湯布院町並柳	8月13日	並柳自治公民館で庭入り	寄せ踊り A	
	湯布院町荒木	8月13日	荒木公民館で庭入り	合同初盆会／寄せ踊り A	
	湯布院町若柳	8月13日	初盆の家で庭入り		
	湯布院盆地祭り(j)	8月16日	由布院駅前通りで合同庭入り(塚原・並柳・荒木)	(A)	
日 出 町	南 畑	8月13日	初盆の家で庭入り		
	南畑字今畑	8月13～15日	初盆の家で庭入り		
	南 端 (k)	8月13日	初盆の家で庭入り		
杵築市山香町上河内	8月13日	初盆の家で庭入り	A		

① 実施範囲（合同実施の地域範囲）

- (a) 温見は温見野。奥鍋・中鍋・中江・岩下・分寺の各集落の集合体で、温見盆踊り保存会が実施。
- (b) 余上7集落は上余・平原・栗山・滝貞・小平・大坪・岡の各集落の集合体。
- (c) 中央は豊石・上内河野・水車・広連の各集落の集合体。
- (d) 大和は矢畑・下内河野の各集落の集合体。
- (e) 鷹声は舟板・平山・新貝・大黒・原・川底・境ノ坪・仏木・村部の各集落の集合体。
- (f) 筈ノ口は口ノ原・田代・土肥・本村の各集落の集合体。
- (g) 南香は元・寒水・福貴野・枝郷・山ノ口の各集落の集合体。
- (h) 四連区は森・大・今井・西納の各集落の集合体。
- (i) 佐田地区は佐田・塔ノ尾・大見尾・矢津・広谷・口ノ坪・笹ヶ平・古川・内川野・山蔵・房ヶ畑・且尾・矢崎・久井田・熊・平ヶ倉など16集落の集合体。
- (j) 湯布院盆地祭りの庭入りはJR由布院駅前（湯布院町川上）由布見通りで行い、塚原、並柳、荒木の3地区が参加し、その中の1地区が「庭入り」行事を実施。
- (k) 南端は目刈・高平の各集落の集合体。

② 傘鉦の形態

- A（花籠合体型傘鉦）・B1（花籠分離型傘鉦 [多段横竿式]）・B2（花籠分離型傘鉦 [多段輪式]）
- C（その他の形態の傘鉦）

※宇佐市矢部・同市麻生地区山口などでも戦後しばらくまで庭入りをしていたという。



は、旧安心院町佐田にも近く、その影響も考えられる。

由布市湯布院町の庭入りは安心院町から伝わったものだと伝承がある。湯布院町の盆踊りの演目「萬場踊り」「三佐東西」「蹴出し」「まかせ」「二つ拍子」「左衛門」「しのめ」のうち、「萬場踊り（番場踊り）」「蹴出し」「まかせ」「二つ拍子」は、旧安心院町を含む宇佐市のものと同じであり、傘鉾の形態も安心院町の傘鉾花傘合体型とほぼ同型である。そのため伝承通り安心院から伝えられたものと考えられる。庭入りの伝えられている旧湯布院町の地域は、昭和25年に速見郡（かつての山香町・日出町・杵築市・別府市の範囲）から大分郡へ移行した所である。このことから、庭入りは宇佐郡、速見郡の山間部だけに分布していることがわかる。また旧湯布院町とは逆に、旧安心院町の南香では湯布院町から習ったとの伝承がある。富貴野などの南香地区は深見川の最上流域に位置し、安心院と湯布院の交通路添いにあり、一度湯布院に伝わった庭入りが逆に峠近くの南香に伝わったもので、道が文化を運んだことが良く分かる。

### 3. 庭入りの変遷

#### 時宗起源説

小泊立矢氏は、「現在、安心院町から院内町、別府市天間にかけて分布している念仏踊り系の盆踊りは、番場時宗（時宗一向派）の聖が広めたものといわれているが確証はない」といい、「ただ、一向派の祖一向俊聖が、文永十一年（1274）に『宇佐八幡で四十八夜の踊り念仏を修す』とあるので、佐田神社の板碑も含めて番場時宗の結びつきをいうのかもしれない」と述べている<sup>(3)</sup>。庭入りに引き続き行われる盆踊りの中に「バンバ踊り」という演目があることも、根拠のひとつになっている。宇佐市下時枝の豊前善光寺は空也上人開基と伝える浄土宗寺院であるが、残された石造物の銘文から南北朝期から室町前半期まで時宗の影響下にあったと考えられている。しかし、この時期に時宗が供養盆踊りを行っていたとは考えられない。庭入りに時宗の影響があったとしても、間接的なものだったであろう。庭入りの成立期を伝える史料は今のところ見つかっておらず、その詳細は不明としか言いようがない。

#### 庭入りから寄せ踊りへ

本来、庭入りは村の若者たちが行っていたため、現在でも齊藤地区などのように男性だけで行っている所がある。『院内町史』に、この地域の庭入りは「戦時中中止され、戦後も衰退していたが、昭和二五年頃に復活した」と記され、戦時中は庭入りの主体となる青年たちが兵士として応召され、戦後は経済的にも社会的にも混乱が続き、庭入りは中断せざるを得なかったという。しかし、亡くなった人への供養の意識は強く、経済的に安定し始めた段階で、すぐさま復活したのである。また、遅れて昭和50年前後に復活した院内町小稲、大門、平原などの地区もある。

現在では過疎化と少子化の影響を受け、青年だけでは維持できず、集落ごと、あるいはいくつかの集落が合同で実施するようになってきている。また、青年だけではなく、壮年、中年、初老の集落構成員の男性の大多数が参加するようになっている。また、現在は庭入りに老若男女が最初から参加する所もある。

高度成長期、農村部の過疎化の中で担い手であった青年たちが減少し、「寄せ踊り」といって、各初盆の家に庭入りするのをやめて、小学校の校庭などで行うようになった所も多い。平成27年（2015）現在、初盆の家の坪で庭入りを行っているのは、旧院内町の温見、齊藤、下余、広瀬、旧安心院町の上荘・戸方、荘、大口田、松本、中山、旧湯布院町の塚原、若杉などである。

### 佐田の寄せ踊り

寄せ踊りを戦後最初に行ったのは、宇佐市安心院町佐田地区であった。明治32年（1899）、佐田・塔ノ尾・大見尾・矢津・広谷・口ノ坪・笹ヶ平・古川・内川野・山蔵・房ヶ畑・且尾・矢崎・久井田の14ヵ村が合併して佐田村となったが、戦前までは14の集落に分かれ、それぞれ初盆の家で庭入りをしていたと伝えている。また、8つの集団で行っていたともいう。当時は大勢いた男女の青年団員が庭入りの中心となっており、子どもたちも参加して賑やかな初盆供養の行事であったという<sup>(2)</sup>。昭和24年（1949）、佐田村は北部の西馬城村の一部（平ヶ倉と熊）を編入し、これが現在の佐田地区で、佐田小学校での寄せ踊りの庭入りの範囲となっている。戦時中に中断した庭入り行事は、戦後の昭和20年代前半の経済混乱期に、伝統的な行事を守ろうと、佐田村の青年団の若者たちが新仏の位牌を初盆の家から借り出し、佐田小学校の校庭で佐田地区合同の供養盆踊りを行い、「庭入り」行事を継承するようになった。戦後の庭入り復興は「佐田村」という村単位で取り組んだのである。なお、昭和30年（1955）に安心院町・深見村・津房村、それに駅館村の一部と合併して、新たに安心院町となり、平成17年（2005）には院内町と宇佐市と合併して新しい宇佐市となった。高度成長期に青年団が弱体化した後、佐田公民館が佐田の庭入りを主催するようになった。初盆家庭の家族を招いて祭壇に位牌を祀って、それに向かって庭入りをしていたのである。平成20年（2008）、佐田の町づくり協議会が庭入りを担当するようになり、初盆の家が出すお礼の金品を受け取るのを断るために新仏の家族を招かなくなった。当然、位牌を祀る祭壇もなくなった。そのため、庭入りに参列する人は少なくなり、寂しい行事になってしまった。

### ゆふいん盆地まつりと庭入り

由布市湯布院町は庭入り行事の南限である。ここでは「ゆふいん盆地まつり」という観光イベントが開催され、庭入りの傘鉦が登場する。このゆふいん盆地まつりは昭和44年に始まり、平成27年で47回目を数える。現在、ゆふいんまつり推進委員会とゆふいんまつり実行委員会が主催しているが、旧湯布院町が中心となって開催してきたイベントである。8月15日に太鼓の競演、蝗攘祭、万灯笼火祭り、ゆふいん盆地花火が行われ、16日には合同慰霊祭、庭入り、供養盆踊り大会が催される。蝗攘祭は齋藤実盛のわら人形を用いた虫送り行事で、昔の行事を復活させてイベント的に派手な演出を加えたもので、観光イベント的な要素が強い。翌16日は午後7時から合同慰霊祭、7時40分から庭入り、8時から供養盆踊りと、盆行事が次々に開催される。JR由布院駅の駅前から伸びる新町由布見通りの宇奈岐日女神社の鳥居から白滝橋までの全長約300mの区間が特設会場となり、期間中は自動車通行止めとなる。特設会場のほぼ中央の路上に張られたテントに祭壇が設けられ、僧侶たちによって合同慰霊祭が行われる。テントを挟んで白滝橋側に並柳地区と荒木地区の傘鉦、由布院駅側には塚原地区と山崎地区の傘鉦が2本ずつ立てられる。なお、山崎地区は傘鉦を出すのが、庭入りをしない。道路には傘鉦用の孔が開けられており、普段は鉄蓋を被せている。孔に鉄管を立てて、そこに傘鉦の竿を挿して立てるのである。また、傘鉦の横には献灯と書いた提灯を6個ずつ5段に



写真3：湯布院盆地まつりの傘鉦

並べた竿灯風の飾り物が立てられている。庭入りは、並柳、塚原、荒木の各地区が毎年交代で実施している。庭入りは特設会場中央の祭壇の所に揃いの浴衣姿の男性たちが弓張り提灯を手に持って行列してきて、祭壇の前で整列した後、シカシカを読み上げ、和讃を詠じる。その後、浴衣姿の老若男女が由布見通りの両側に細長い輪となって、右廻りに供養盆踊りを踊る。円ができるまでは「二つ拍子」で踊り、人々の円が繋がれば「マカセ」「左衛門」「ケダシ（蹴出し）」などの演目を踊る。

ゆふいん盆地まつりに庭入りで参加する3地区は、13日の夜にそれぞれの地区で庭入りを行っている。現在、初盆の家で庭入りするのは塚原地区だけで、荒木地区と並柳地区はそれぞれ公民館で実施している。また、並柳地区の北方の若杉地区でも、初盆の家を訪れる庭入りを伝えているというが、盆地祭りには参加していない。

塚原地区は由布院盆地の北方の標高500mほどの高原地帯で、市街地から6kmほど離れている。夕方6時30分頃から庭入りを行う。まず、傘鉦を初盆の家のツボ（坪。内庭）に立て、揃いの浴衣を着た男たちが一列になって入場する。平成26年には傘鉦持ちを含め、総勢20名であった。先頭の者は塚原と書いた弓張り提灯を持ち、次にマキモノ（シカシカの読み手）、その他の人たちは横笛を吹きながら続き、最後に太鼓と鉦を叩きながら付き従う者2名。道行きの時には「ミチブエ（道笛）」、ツボに入ると「ニワブエ（庭笛）」を奏する。ツボで逆時計回りに一周して、縁側の前に三列になって整列し、全員で立ったまま和讃を詠唱する。和讃は新仏の年齢や性別で題目は違う。10歳までの子供は「児童和讃」、11歳から20歳の人には「七七日」、60歳までの男性は「帰命長来」、60歳までの女性は「そもそも都」、60歳以上になると男女共同「箱根」となる。また、寺で唱える時は「守屋」となる。新仏の家の縁側添いの座敷には仏壇があり、遺族が正座して庭入りの一行に対応する。次に最前列中央のマキモノが折り畳み椅子に座り、手に持っていた巻物を広げて「シカシカ」を読み上げる。その間、他の者はその場で蹲踞する。終わると、一列になってツボを時計回りに一周して退場する。この時、ツボでは「ニワブエ」、道行きでは「ミチブエ」を奏する。そして次の初盆の家に向かう。平成26年は4軒の初盆の家で庭入りし、夜は塚原小学校の校庭に傘鉦を立て、地区の老若男女が集って供養盆踊りを踊った。

並柳地区は戸数約70戸、自衛隊宿舎の住民を入れると約100戸の集落で、由布院盆地の南斜面に広がっている。並柳地区では昭和40年代まで初盆の家で庭入りしていたが、現在は寄せ踊りとなり、並柳自治公民館で行っている。平成26年には、8月3日（日）、6日（水）、10日（日）に盆踊りの練習を公民館で行い、10日には傘鉦も作る。そして13日（水）が「並柳供養盆踊り（庭入り）」の日で、午後7時の読経から始まる。16日（土）の「盆地まつり」に参加し、18日（月）には白心荘（特別養護老人ホーム）へ供養盆踊りに行くというスケジュールであった。並柳供養盆踊りは公民館前の駐車場で行われる。初盆の家の人たちは公民館の座敷に座り、窓越しに庭入りを受けるのである。和讃は、新仏が10歳以上の男性の場合は「地藏和讃」、女性の場合は「女人和讃」、未婚女子は「花座和讃」、子供の場合は「子供和讃」、仏閣・庵では「森屋の大臣」という。和讃の後に「シカシカ」が読み上げられ、その後は老若男女による盆踊りとなる。

荒木地区では8月13日午後7時から「荒木区合同初盆会」を荒木公民館で行い、その前の駐車場で7時50分頃から庭入りを行う。駐車場で傘鉦を先頭に隊列を組む。傘鉦は3名の男たちが捧持する。「荒木区」と書いた弓張り提灯を持った人と「しか、しか」を詠む人が先導する。傘鉦の次に縦笛（リコーダー）10名、太鼓と鉦が続き、揃いの浴衣を着た男性7名、その後ろを揃いの浴衣姿の女性10名が続く。駐車場には直径10mの円がチョークで描かれており、一行は逆時計廻りに円を描いて三周する。公民館の座敷に正対して、傘鉦を円の中心に立て、その背後に囃子の人たち、右手に男性たち、左手に女性たちが並ぶ。傘鉦の前に和讃を詠む人が出て、「養老和讃」



「中老和讃」「児童和讃」などの和讃を詠唱する。次に「しか、しか」の巻物を読み上げる。先導役の人が弓張り提灯で巻物を照らす。8時過ぎに庭入りが終わり、「萬場踊り」「三佐東西」「けだし」「まかせ」「二つ拍子」「左衛門」「しのめ」の順に口説きが歌われて盆踊りとなる。8時40頃には盆踊りも終わり、傘鉾を先頭に隊列を組んで退場する。

#### 4. 庭入りの傘鉾の形態

「庭入り」に用いられる傘鉾はそれぞれ地区ごとに違いがある。折口信夫が提示した、いわゆる「髭籠」に分類できる「花籠」と、傘鉾とが一体化した安心院町を中心とした地域もあれば、院内町のように傘鉾と花籠がそれぞれ独立した地域もある。そこで、前者の傘鉾を「花籠合体型傘鉾〔A〕」、後者のものを「花籠分離型傘鉾」として分類する。また、「花籠分離型傘鉾」は傘下の提灯の吊り下げる腕木の形態で大きく二種類に分けることができる。多段の横竿に提灯を下げる「花籠分離型傘鉾（多段横竿式）〔B1〕」と多段の輪に提灯を下げる「花籠分離型傘鉾（多段輪式）〔B2〕」とである。それ以外に傘部が省略された傘鉾など、さまざまな傘鉾〔C〕が存在し、麻生谷のように花籠のない地域もある。

##### (1) 花籠合体型傘鉾（A）

###### 佐田の傘鉾

宇佐市安心院町佐田の傘鉾は全高約4.8メートルあり、高さ4メートルの竹竿の先に直径約1.2メートルの番傘を括りつけ、「南無阿弥陀仏」と墨書した約30cm幅の赤い幕を傘の縁に巡らせる。番傘の幕の中に長提灯を3挺吊るし、傘の柄に行灯を装着する。その下の竿に約1.8メートルの竹を十字に装着し、その先端に赤い丸提灯を1個ずつ計4個を下げる。その直下に割竹を輪になるように装着し、竹の柄に縛り付けた多数の細い竹ヒゴをその輪に掛けて垂らす。垂れた竹ヒゴは直径約1.5メートルほどに広がり、その上部を約45cm幅の紫色の幕で囲う。竹ヒゴには赤・青・黄・白色の七夕紙（色紙）を貼り付ける。

###### 荘の傘鉾

宇佐市安心院町荘の傘鉾の全高は約4mあり、竹竿の先に蛇の目傘を差し込んである。傘の縁に「南無阿弥陀仏」と墨書した条幅紙を下げる。傘の柄の上部に十文字になるように細竹を結びつけ、下げた紙の間に出して、その先に白い丸提灯をそれぞれ1挺、計4挺吊り下げる。その下にも瓢箪を逆さまにしたように編んだ竹籠を装着する。さらにその下に上に向けて竹ヒゴを縛り付け、荒い花籠状に編む。残った竹ヒゴを下に向かって垂れさせる。その竹ヒゴには赤・青・黄・緑などの色紙を糊付けし、この花籠状の竹ヒゴの中に五色の長い布を垂らす。

###### 六郎丸の傘鉾

宇佐市安心院町六郎丸の傘鉾は全高4mある。太い竹竿の最上部に番傘の柄を差し込んでいる。傘の縁には細い白紙を多数垂らし、傘の下に黄色と浅黄色の提灯を3挺ずつ計6挺下げて「南無阿弥陀仏」と一文字ずつ書き込む。その下に放射線状に伸ばした多数の竹ヒゴを編みこんだ籠を取り付ける。竹ヒゴは地面すれすれまで垂下し、白い紙が多数貼り付けられている。籠の下には「南無阿弥陀仏」と書いた長提灯を4挺下げる。



写真4：六太郎の傘鉦



写真5：天間の傘鉦



写真6：荘の傘鉦

### 天間の傘鉦

別府市天間の傘鉦は番傘の柄を真竹の棹に挿入して高さ3.5mほどにしたもので、2人の男衆が捧持する。番傘の縁には幅30cmほどの赤い布を巡らせ、その赤い布には南無阿弥陀仏と墨書きしている。番傘の下に赤提灯を4挺下げ、その下に竹棹に浅い籠状の花籠を取り付ける。花籠の下に白い長提灯3個を下げ、花籠を編んだ竹ヒゴの残り約40本はそのまま2.5mほど垂らす。花籠から長さ2mほどの黄色や赤色の布を幕のように垂らし、竹ヒゴには沢山の赤・浅黄(青)・黄・白の布切れを結びつける。

### 上河内の傘鉦

杵築市山香町上河内では8月12日に上河内の若者たちが集まって傘鉦を作る。傘鉦は長さ約3mの竹竿の先に和傘を結びつけ、傘の縁に赤い布を巡らせたものである。傘の下の柄に2.5m程の長さのホゴ(竹ヒゴ)を上に向けて50~60本縛りつけ、それに切った色紙を多数糊付けする。ホゴは傘鉦の持ち手を覆うように広がって垂れ下がる。

### 塚原の傘鉦

由布市湯布院町塚原の傘鉦は全高3.6m、竹竿の上に番傘を取り付ける。傘の下に傘の縁より20cmほど内側に、「南無阿弥陀仏」と墨書した幅36cmの白い幕を巡らせ、幕の中に「塚原」と書いた長提灯4挺を下げる。その下の竹竿にたくさんの竹ヒゴを上に向けて縛る。少し広がって垂れ下がった竹ヒゴには細い短冊状の色紙が糊付けされる。広がった竹ヒゴの内側に直径約2m、高さ90cmほどの幕を巡らす。この幕は浅黄、赤、黄、薄緑、白、紫色の幅36cmほどの布を縦に縫って作られている。この幕の中に「南無阿弥陀仏」と書いた長提灯を4挺下げる。

### 並柳の傘鉦

由布市湯布院町並柳の傘鉦は全高約4.2m、竹竿の上に蛇の目傘を取り付け、傘の縁に幅36cmの白布を幕として巡らせる。傘の下に直径約1mの竹ヒゴの輪を装着し、放射線状に多数のヒゴを装着する花籠を取り付ける。白い短冊状の紙を糊付けしたヒゴは垂れ下がる。その中の上部に「南無阿弥陀仏」と書いた長提灯2挺を下げ、長さ2.6mほどの赤、桃、緑、青、黄色の布を垂らす。



写真7：塚原の傘鉾



写真8：並柳の傘鉾



写真9：荒木の傘鉾

### 荒木の傘鉾

由布市湯布院町荒木の傘鉾は全高約5.2m、竹竿の先に番傘を取り付け、傘の縁に「南無阿弥陀仏」と書いた幅36cmの白布を幕として巡らせる。傘の下には紅白の小型の長提灯5挺と桜の花と葉の造花を多数吊り下げる。その下には花籠が装着され、垂れ下がる多数の竹ヒゴには赤と白の細い短冊状の紙を糊付けする。花籠の下には「南無阿弥陀仏」と書かれた長提灯4挺と赤、浅黄、黄色などの色布を吊り下げる。

### (2) 傘鉾花籠分離型 [多段横竿式] (B1)

#### 齊藤の傘鉾

宇佐市院内町齊藤の傘鉾は全高7.5mあり、細い杉丸太の柱最上部に蛇の目傘を結びつける。傘紙には「齊藤若連中」と墨で大きく書いてあり、傘の縁に「南無阿弥陀仏 齊藤若連中」と墨で書いた白幕を巡らせる。傘鉾の中心の柱に9本の竹竿を杉丸太に水平に縛りつけて提灯を下げる。真ん中の5段目が最も長くて3.8mある。最上段には6挺の細長い長提灯を左右に3挺ずつ計6挺下げ、2段目以下は丸い小提灯を吊り下げるが、2段目8挺、3段目10挺、4段目8挺、5段目12挺、6段目8挺、7段目8挺、8段目8挺、9段目6挺、計74挺の提灯を下げる。

花籠は全高4.2mほどの真竹の竿に、ヒゴの先端を約3m伸ばした竹籠を取り付けたもので、ヒゴには細い色紙で作った短冊を多数貼り付けてある。齊藤の花籠は竿が中央にきてヒゴが周囲に垂れる。上部2段に割り竹でぐるりと輪を作って紐でヒゴを固定している。

#### 下余の傘鉾

宇佐市院内町下余の傘鉾は全高6.5mある。孟宗竹の竹竿を縦に立て、その最上部に赤い蛇の目傘を結びつけ、7本の真竹の竹竿を水平に縛りつける。横竿は下部が最も長くて4.2mあり、ほぼ上に行くに従って短くなる。最上段には大型の白い長提灯を左右に1基ずつ計2挺下げる。傘を竹竿に固縛した部分に紅白の小さな丸提灯を1挺下げ、2段目に6挺、3段目に8挺、4段目に8挺、5段目に10挺、6段目に12挺、計47挺下げる。丸提灯には地区の家々の戸主名が記され、「下余」



写真10：下余の傘鉾と花籠

と書かれたものや無地のものもある。なお、下余集落は38戸（平成21年当時）ある。

花籠は長さ4.5mの真竹の竹竿の先端部に竹ヒゴで編んだ籠を取り付けたもので、竹籠のヒゴはそのまま3.5mほど伸ばす。竹ヒゴがばらけないように、竹籠の直上を2ヵ所細く縛り、その上部50cmほどの所を直径70cmほどになるように針金を用いて広げるように編む。竹ヒゴには11挺の紅白の丸提灯、それに多数の色紙で作った短冊を吊り下げる。立てた花籠のヒゴは片流れになるので、地元では枝垂れ柳式であるという。

### 余上の傘鉾

宇佐市院内町余上の傘鉾は盆踊りの櫓の柱に固縛するため、非常に背が高く、全高約10mある。そのため傘鉾の竿には細い杉丸太を用いている。横竿に提灯を吊すタイプの傘鉾で、地表から約5mから上に竹竿7本を水平に縛りつけ、提灯を6段吊り下げる。最上段は左右に長提灯を1挺ずつ計2挺、2段目は長提灯を2挺ずつ計4挺、3段目と4段目はそれぞれ紅白の小さな丸提灯を5挺ずつ10挺。最下段の5段目は長提灯を1挺ずつ計2挺を吊り下げる。これらの長提灯には「余青年会」と墨書されている。花籠はない。



写真11：余上の傘鉾

### 上納地の傘鉾

『院内町誌』によれば、宇佐市院内町上納地の傘鉾は「最上部に蛇の目傘を付けてその周囲に赤布を巻き、飾りと提灯を多数下げてある。上納地では、昭和初期に電燈が使用され始めるまでは、高さ五間〔約9m〕で、提灯60から70個を五段に分けて下げていた。以後、電線に引っかかるので小さくなり、提灯も20個から30個にしたという」と記されている。

## (3) 花籠分離型傘鉾〔多段輪式〕(B2)

### 温見の傘鉾と花籠

宇佐市院内町温見の傘鉾は全高約5mあり、竹竿の上に番傘を立てる。傘の縁には白い幕を巡らせ、傘の縁から金紙と色紙の飾りを幾筋も下げる。傘の下に横長四角の木枠が取り付けられ、左右に1個ずつの提灯（据提灯の脚を取り去ったもの）を枠内に吊り下げる。その下には5段の輪が取り付けられ、それぞれ12個から14個の提灯を吊り下げる。輪は下になるほど直径が大きくなる。傘鉾の近くには花籠を立てるが、スタレヤナギと呼ばれているという。髭籠のヒゴの先には木の葉型に切った色紙を貼り付ける。



写真12：温見の傘鉾と花籠

### 広瀬の傘鉾

宇佐市院内町広瀬の傘鉾は全高約5メートルで、竹竿の先に番傘を取り付け、傘の縁に墨で「南無阿弥陀仏」と書いた白地の布幕を巡らせ、傘



の下の竿に横木を括り付け、2挺の丸い提灯を下げる。その下に上半分が赤く染められた小型のほおずき提灯を吊り下げる。竿に十字の横桁を結び付け、それを支えに割り竹で作った円形の枠を外側に取り付け、そこからほおずき提灯を下げる。円形の枠は3段で、上段が直径約1.2mで提灯9挺、中段は直径約1mで提灯7挺、下段は直径約1.5mで提灯13挺を下げる。

#### (4) その他の形態の傘鉾 (C)

##### 南香の傘鉾と花籠

宇佐市安心院町南香の傘鉾は全高4.5mあり、長さ4.2mの真竹の竹竿上部に「南無阿弥陀仏」と書いた番傘の柄を差し込んで取り付ける。幕の代わりに、番傘の四方に「南無阿弥陀仏」と書いた長さ80cmの習字用紙を垂らす。竹竿の高さ2.7mのところ細い丸竹を十文字に組み、丸竹の先に「南香公民館」と書いた白の丸提灯を1挺ずつ下げる。また、高さ1.4mの高さにも細竹を十字に組み、丈の高い住吉提灯を1挺ずつ下げる。住吉提灯は初盆の家で供えられたものである。

花籠は全高4.5mあり、竹竿の頂上部に中黒に塗った的のような円筒型の飾りを載せ、その下に髭籠を取り付け、周囲に多数のヒゴを垂らす。途中2段の割り竹の輪を入れてヒゴの形を整える。上段の輪の直径は1.8m、下段は2.1mある。竹ヒゴには多数の短冊状の色紙を糊付けし、小提灯を沢山吊り下げる。



写真13：南香の傘鉾と花籠

##### 尾立の傘鉾

宇佐市安心院町尾立には傘鉾はなく、全高4.1mの独特な花籠がある。竹竿の頂上部に扇形のつくりものが載せられ、その表裏に日月を描く。竹竿の上部には花籠が取り付けられ、多数の竹ヒゴが垂下する。その下に2段に割り竹の輪が付けられ、それぞれ「南無阿弥陀仏」と書いた長提灯を4挺ずつ下げる。最上部の扇形の飾りには放射線状に竹ヒゴがつけられており、傘の名残りであると考えられる。

##### 中央の傘鉾と花籠

宇佐市安心院町中央の傘鉾には傘がない。傘鉾は4mの竹竿を柱に、2段に幕を張り巡らせる。竹竿に十文字に細竹を縛りつけ、その端に輪になった割り竹を取り付け、黄色・青色・浅黄色の布で作った幕を巡らせるだけである。上段の十文字に組んだ細竹に盆提灯を4挺、それに紅白の小丸提灯を2挺下げる。

花籠はハナボコ（花鉾）と呼ばれ、全高4.4mの竿の最上部に花籠を取り付ける。花籠のヒゴに短冊状の紙やさまざまな切り紙細工が付けられている。



写真14：中央の傘鉾と花籠

##### 上麻生の傘鉾

宇佐市上麻生の傘鉾は、全高3mあるが、竹竿の頂上部に傘をつけない。真竹の竹竿の先を少し出して直径1.6mの六目編みの平籠を傘のように取り付ける。平籠の下に割り竹の輪を針金



写真 15：上麻生の傘鉦



写真 16：中麻生の傘鉦



写真 17：下麻生の傘鉦

で3段水平に吊り下げ、それぞれに紅白の提灯を下げる。平籠には11挺、上の輪に10挺、中と下の輪に8挺ずつ下げるのである。

#### 中麻生の傘鉦

宇佐市中麻生の傘鉦は、鉦打太鼓を横に格納する縦長の四角構造の本体部を前後に担ぎ棒が貫いており、この本体部の中央上に番傘を立てるようになっている。全高2.3mで、本体部は高さ1.4m、幅0.6m、長さ0.8m、担ぎ棒の長さ2mである。番傘には「中麻生盆踊保存会」と墨書きされ、傘の下に白の小型丸提灯5挺を吊り下げるだけである。これは中津市の鶴市神社仲秋大祭の傘鉦祭りなどに出される「豊前系太鼓昇山型傘鉦」の本体部と同型であり、盆行事である庭入りの傘鉦としては異色である。

#### 下麻生の傘鉦

宇佐市下麻生の傘鉦の全高は約4mある。竹竿の最上部に蛇の目傘をつけるが、幕を下げない。3段の割竹の輪を十字に組んだ竹で竿に固定する。赤と白の丸提灯を最上段の輪に8挺、中段と下段の輪にそれぞれ12挺下げる。

### (5) 傘鉦・花籠・提灯

#### 依り代としての傘鉦

庭入りをしている人たちに傘鉦の役割について質問してみたが、なかなか芳しい答えは返ってこない。佐伯市米水津で傘鉦に新仏の霊が依り憑くと明確に意識している点からすると、庭入りの傘鉦の役割は伝承上は明確ではない。しかし、シカシカの口上の中にヒントが隠されていた。旧安心院町笠ノ口のシカシカに「目連尊者の御庭に 高さ九尺の棚を架け 三界萬霊のいはいを飾り 蓮の葉を傘として その下に立ち寄り踊りと号す」という段がある<sup>(4)</sup>。同様に、宇佐市下麻生のシカシカには「高サ九尺ニ棚を掛ケ 三界萬霊ノ位牌ヲ備ヘ 上ニ白蓮華ヲウナダレテ 笠かきぼこノ元ニ立寄りテ 西ニ扇ヲ指シ揃ヘ 衣ノ袖ヲ打チ振りテ 満場々々ト踊ラセ賜フ」と記されている。また、旧湯布院町荒木のシカシカには「蓮の葉をカサボコとなし、萬場踊りを踊らせたまう」という一句があり、ここでは傘鉦は蓮の葉であると明確に示している。西方極楽浄土の蓮の台には、仏菩薩や極楽往生した念仏者が座ることができるとされているのである。このことから、蓮の葉に比定された庭入りの傘鉦は、新仏の霊が憑依するものだと考えても良いのではないだろうか。シカシカの文句はそれぞれの地域で異なっているが、今後、精細に調査して検討

していくと、この3例以外にも蓮の葉との関連を記したシカシカが見つかるかも知れない。

庭入りは同一日時に一斉に行われるので、現地調査ともなると、各地区を自動車でも走り回らなければならない。当日の夜、このあたりだろうと、庭入りする家を探したことがあった。自動車でも走りながら探していると、水田の彼方の暗闇の中に光り輝く傘鉦の提灯のピラミッドを見つけ、無事、庭入りを見ることができた。現在、提灯の明かりは明るい電灯になっているが、昔のロウソクの明かりの時代でも、遠くからでも傘鉦は良く見えたことだろう。あの世から戻ってくる新仏の霊にとっても、傘鉦は探しやすい目印だったに違いないと、その時ふと思った。庭入りの傘鉦が依り代として実にすばらしい形態を持っているのだと実感したのである。

### 生根神社のだいがくとの類似

院内町に見られる花笠分離型傘鉦（多段横竿式）にそっくりの昇山がある。大阪市西成区玉出の生根神社の「だいがく」である。台楽とか台額と表記されるが、雨乞い神事に用いられた昇山の一種である。幕末期には現在の大阪市浪速区と西成区周辺で約20カ所にだいがくがあったというが、明治中期以降、電線の架設や戦争の影響で衰退し、現在は生根神社に伝えられているだけである。生根神社のだいがくは全高約20mあり、心棒の最上部からダシ（神楽鈴）、櫛と御幣、ホコ（京都祇園祭の山鉦の屋根に被せる網隠しに類似した緋色の木綿布）、額行灯、ヒゲコ（傘形）2段、大鈴、金額縁、一人持ち提灯、ヌキ8本と御神灯78個（本来は旧国数66個）、水引（ヌキの外縁部を結び留める紅白の布・下端部に絹房と大鈴をつける）、チョウサ（起倒時に用いる引き綱）などで構成され、全体が高欄を載せた桧製の台に立てられている。台には4本の昇棒が固縛されており、台上に大きな鉦打太鼓が据えられている。



写真18：  
生根神社のだいがく

このだいがくに関して最初に研究したのは折口信夫であった。1915－1916年の『髭籠の話』ではダイガクの傘部の部分名称が「ひげこ」と言い、1918年の『だいがくの研究』では「だいがくと住吉踊りの傘鉦との関係を見せて居る様に思はれる」と、近くの住吉大社の影響を述べている。

提灯 ヌキ（横竿）に吊された多数提灯という点では、院内町の花笠分離型傘鉦（多段横竿式）と同系統の傘鉦であるといえる。院内の人が大阪のだいがくを見て影響を受けた可能性も否定できない。しかし、花籠は折口信夫の言う「髭籠」そのものであり、傘鉦同様に新仏の霊の依り代として機能していることは間違いないであろう。

また、庭入りの傘鉦に提灯が必ず付いていることは、ただ単に夜の行事であるために照明として用いられたと考えるのは短絡的であろう。米水津の盆行事では、提灯を子供に持たせて墓地まで精霊迎えに行き、その提灯に靈魂をこめて家まで持ち帰るといふ。また、初盆の家の住吉提灯をつける南香の傘鉦もあり、提灯は新仏靈魂の容器と考えられるのではないだろうか。これは燈籠や東日本の祭礼での笠鉦などで用いられる行灯型の万灯も同様であろう。

## 5. 庭入り事例

### 【事例1】 荘の庭入り

安心院町荘地区では荘盆踊り保存会が8月13日に初盆の家を廻る庭入りを行う。平成24年は3軒の初盆の家があり、午後7時頃から庭入りを始めた。初盆の家に行列を組んで訪れるが、

番傘をさして「盆踊り保存会」と書いた弓張り提灯を持つ介添え役の人とシカシカ読みの2人が先導し、その後ろを縦笛（リコーダー）1人と太鼓2人が続く。次に進むのが傘鉦で、その後ろに踊り手の男たちが続く。仏壇のある座敷の縁側には、遺影を中心に遺族代表が正座して座る。ツボに傘鉦を立て、一行は縁側に正対するように整列する。和讃を詠む人と傘を差し掛ける人、シカシカ読みの3人が立ち、その他の者は蹲踞する。まず、和讃を詠唱し、次に「東西南北（シカシカ）」の巻物を読み上げる。その後、昔はそれぞれの初盆の家のツボで盆踊りをしていたが、平成9年からゲートボール場で盆踊り大会をするようになり、初盆の家での踊りはなくなった。盆踊り大会は午後9時から始まり、参加者にはくじ引きで景品が当たるようになっており、子供たちには無料でかき氷が振る舞われる。踊りの演目は「バンバ踊り」「レソ」「マカセ」「二つ拍子」「ケダシ」「大津絵」「エッサッサ」などで、1時間ほどで終わる。

### 【事例2】 天間の庭入り

別府市天間地区では、毎年8月13日、14日に「庭入り」が行われてきた。13日は初盆の家を1軒1軒廻り、14日は天間山正円寺（浄土真宗）で無縁仏供養を行う。庭入りは古くから男性だけで行われてきた新仏供養の盆踊りで、多くの人手と労力を要したため、かつては青年団が主催していたが、青年たちの数が減少した昭和40年の頃から、天間公民館が中心となって地区内の成人男性によって執行されるようになった。

8月14日、正円寺では本堂の阿弥陀如来像前に「天間無縁供養碑」と書かれた位牌を立て、住職が供養のお経をあげる。午後7時半、正円寺の庭の中央に高さ約4mの傘鉦が立てられ、その後に浴衣を兵児帯で締めた下駄履き姿の男衆が、本堂に向かって五列縦隊に整列する。太鼓1人・笛6人・鉦2人の囃子手が隊列前部に立つ。傘鉦の真ん前には弓張り提灯を手にした「若」が、本堂に向かって不動の姿勢で立つ。太鼓・笛・鉦による道囃子に続いて祇園囃子が奏され、庭入りが始まる。まず、「頭」が念仏を唱え始め、他の者も念仏を唱和する。その後、哀調を帯びた「和讃」が始まる。新仏の性別や年齢に応じて、和讃は詞章の異なった6種類があり、無縁仏供養ではその全てを詠唱する。「児童和讃」「花田和讃」「六字和讃」「善光寺和讃」「都和讃」「箱根和讃」である。和讃に続いて「サンガシラ」と呼ばれる念仏の後、「シカシカ」の口上となる。シカシカは盆踊りの由来を説いた口上書きで、一巻の巻物に仕立ててある。口上者となる自治委員は、本堂の階段下に腰掛け、若の差し出す提灯の明かりで朗々と読み上げ、太鼓打ちは句切りごとにトントンと合いの手を入れる。シカシカの最後の句を受けて、庭入りを締めくくる「ばんば踊り」となる。男衆全員が傘鉦を中心に輪を作り、声を揃えて歌いながら踊り始め、音頭取りの口説きに応じて素朴な所作の踊りを繰り返す。踊りは一転して「三つ拍子」に代わる。これからは女性や子供も加わり、踊り子は一挙に百人程にふくれ上がる。太鼓も一段と軽やかに叩かれ、「マッカセ」「レソ」「七つ拍子」と順に踊り進む。最後に調子の速い「ケダシ」になる。これは男衆だけの踊りである。公民館長が参会者一同に供養踊り終了の謝辞を述べた後、会場の後片付けとなる。「傘鉦倒し」といって、男衆たちは傘鉦を丁寧に倒し、本堂に設けられた保管場所に運び入れて庭入りを終了する。

天間の庭入りは平成23年から休止状態となった。踊りの所作が複雑で難しく、横笛吹奏の習熟が困難であり、過疎化で伝承者が減ったことが休止の理由だという。

### 【事例3】 南畑の庭入り

日出町南畑では盆踊り世話はワケーモン組（若者組）が担当し、前日に若者組が集まって傘鉦を製作していた。盆の夜には、初盆の家のツボに入って正面に傘鉦を立て、参会者は縦二列に



並び、最初に「仏申し（念仏「南無阿弥陀」）」を唱える。次に「和讃」を詠唱し、代表者が「シカシカ」を独特の節回して唱える。死者へのお悔やみと初盆会の由来を述べるのである。節回しの区切りで全員が「シカシカ」と相槌を打つ。これは「しかりしかり（然り然り）」の略であるという。シカシカの後に盆踊りが始まる。

大分県速見郡日出町の盆踊りには、初盆の家のツボ（内庭）で盆踊りに先駆けて庭入りが行われるものと、集落の中の広場に新仏の位牌を集めて行う寄せ踊りとである。前者の庭入りが最後まで残ったのが南畑であるという。

#### 【事例4】 上河内の供養踊り

杵築市山香町上河内では、8月7日朝にウンチク（男竹＝真竹）を用いて七夕の笹を作った。不浄ではないという意味で、里芋の葉についた朝露を用いて墨を摺り、子供たちや年寄りが短冊に健康と安全のお願いを書いた。七夕の笹は8日の早朝にまとめて川に流した。

7日には今でも神仏に小麦粉と小豆餡で作った膨らまし饅頭を供える。午後、集落全体でまともって共同墓地の掃除をする。

12日に仏壇の掃除と盆の飾り付けをする。新仏のある家では、親類等から贈られた初盆の据え提灯、物故者の子が用意した吊り燈籠を飾る。仏壇の御供えに手打ちうどん、油揚げ、野菜を供える。供物にうどんと油揚げと麩を欠かすことはできない。13日は朝から夜にかけて、親戚や故人と親しかった人、それに隣組の人たちが「盆悔やみ（お参り）」に初盆の家を訪れる。

13日の夜から14日にかけて、親戚の人たちが集まって飲み明かす。13日の夕方、なるべく遅い時間に墓にお参りして仏さまを送る。精霊迎えはしないが、精霊送りはする。墓地にお供えとお花、線香、水を持参する。夜8時から供養踊りといって新仏の家を庭入りして廻る。物故者のうち男性の年長者から若年者、次に女性の年長者から若年者の順に家々を廻る。庭入りは上河内の公民館の主宰行事のため、公民館長と幹事長が代表者となり、皆よりも先に初盆の家に行って挨拶をして仏壇を拝む。昔はシカシカ奏者の年長者が行っていた。傘鉦を先頭に、太鼓打ち（太鼓は2人が担ぐ棒に吊ってある）、鉦打ち、シカシカ奏者の順で、その後ろに50人ほどの踊り子が続き、新仏の家のツボ（内庭）に入る。いずれも浴衣姿に下駄履きである。縁側に新仏の祭壇が設けられている。壇の上には遺影と位牌が据えられ、両側に据え提灯が置かれて、祭壇の前には供物が供えられている。行列の全員がツボに入ると、シカシカ奏者と太鼓打ち、鉦打ちなどが遺影の前にひざまずき、シカシカ奏者が御詠歌の口調でシカシカを唱える。まず、鉦が打ち鳴らされて、全員で「西方浄土云々」の御詠歌を唱える。次に鉦を打ち、シカシカ奏者が和讃を唱える。物故者が成人男性の場合は「箱根和讃」、成人女性は「女人和讃」、子供の時には「地蔵和讃」である。太鼓が打ち鳴らされて、奏者がシカシカを唱える。シカシカの区切りに2回ずつ太鼓をたたく。その後、供養踊りとなって踊り子たちがツボで輪になって踊る。ツボの中央には縁台（涼み台）が据えられ、その上に口説き手（音頭取り）が上がりて歌う。縁台の1つの脚の側に杭が打ち込まれており、そこに傘鉦を縛って立てる。また、縁台の傍らには四斗樽を置いて太鼓の台にしていた。4～5人の口説き手が交代で口説きを歌い、それに合わせて踊り子たちが踊る。最初に「三つ拍子」、次に「四つ拍子」「マッカセ」「ヤンソレ」「ケダシ」と続く。最近では若い人の中にはケダシを知らない人も多い。「ケダシ」は最もテンポが速く、「マッカセ」がそれに次ぐが、浴衣の裾がはだけるため、女性は恥ずかしがって手で踊るぐらいである。昔は「二つ拍子」や「左衛門」「レソー」なども踊られていたという。口説き手は番傘をさして歌う。1軒の家で供養踊りを一通り踊ると、1時間半はかかる。初盆の家の主人を施主といい、施主は御礼に清酒1升とつまみ、それにお包み（謝礼金）を出した。

16日の午後6時頃に精霊流しをした。上河内の人たちが集まった。ムッカラ（麦程）で全長2.5～3mのオシヨロブネ（お精霊舟）を作り、それに藁人形を乗せた。川の縁に施餓鬼棚を作った。メダケ（雌竹）を脚にして台を作り、線香やロウソクを供えた。浄土寺の住職が読経する中で、お精霊舟を八坂川に流した。昭和50年頃まで、16日の夜にも供養踊りがあったが、これは施餓鬼踊りといって、傘鉦は出なかった。

#### 【事例5】 中央（水車）の庭入り

宇佐市安心院町中央の庭入りは8月13日の夜に行われる。中央は、水車、畳石、上内河野、広連の各大字の連合体である。昔は各大字ごとに初盆の家で庭入りをしていた。それぞれの大字の青年たちが笛と太鼓、それに鉦囃子を打ち鳴らす中、行列を組んで庭を一周して精霊棚の前で整列する。この行列の先頭を傘鉦が進む。数人の青年たちが傘鉦を奉持して歩く。まず、全員で念仏と供養和讃を詠唱し、口上者が盆踊りの由来を書き記した「シカシカ」という巻物を読み上げる。口上者には傍らから番傘が差しかけられる。口上の最後の掛け声を合図にバンバ踊りが始まる。バンバ踊はこの地域の盆踊りに特有の踊りで、傘鉦を中心に輪になった男性によって踊られる。その後、レソ・マカセ・二ツ拍子・三ツ拍子・六拍子・七拍子・大津絵等の普通の盆踊りとなる。

#### 【事例6】 下余の庭入り

宇佐市院内町下余の庭入りは8月13日の夜に行われる。その日の昼間、下余集落センター前の広場で傘鉦とハナカゴ（花籠）を組み立てる。

庭入りを始める前、傘鉦を初盆の家の坪に運び込んで、あらかじめ立てておく。用意ができると、全員が初盆の家の前で整列して、行列を組んで初盆の家の坪に入場する。庭入りの人たちは全員浴衣姿である。まず、区長が塩を撒きながら先頭を進み、太鼓、花籠、笛（横笛）5人、チャンガラ（繞鉦）1名、それに踊り手が続く。太鼓は鉦打太鼓で、2人が太鼓を吊った棒を担ぎ、もう一人が撥で太鼓を叩きながら入場する。踊り手は男性が先に進み、女性はその後が続く。初盆の家の中庭をボンツボ（盆坪）と呼び、一行は反時計廻りに一周し、縁側に向かって整列する。座敷の前の縁側には小机が出され、遺影と位牌、香炉と燭台の三具足、それに供物が供えられている。物故者の遺族が小机の周囲に座り、区長の悔やみの挨拶を受ける。まず、音頭取りが御詠歌「父母の恵も深き小川寺（粉河寺）、仏の誓い頼もしきかな」を唱える。次に、青年1名が前列に立って「シカシカ」の巻物を読み上げる。「東西南北静まり給へ 月にむら雲花に風 夕の稲妻朝の露 夢幻の世のならい……（以下略）」続いて、音頭取りが盆坪の中央の台の上に向かって「ばんば踊り」を口説く。この時、音頭取りは左手に蛇の目傘を持って歌い、踊り手たちは時計廻りに廻りながら踊る。「鐘と撞木が流れて下るよ とかくこの川あ ごしょうの川 後生は願いなあれ お若いとてもよー そよと吹きまくる 無情の風よ ここは一一ノ谷 敦盛さまのよ み墓どころかー おいとおしいやー（ばんば踊り）」太鼓の音と音頭取りの唄で踊る。その後、「東西南北（三ツ拍子）」「まっかせ」「でそう」「ひとつ瓢箪」「ふたつ瓢箪」「けだし」などの口説きで踊る。途中から遺族の代表が物故者の遺影を胸に抱きながら踊りの輪に加わる。最後に「故郷や はるばるここに 紀三井寺 花の都が近くなるらん」と御詠歌が唱えられて、庭入りは終了する。その後、行列を組んで、笛と太鼓、チャンガラを鳴らしながら次の初盆の家に向かう。行列の最後に傘鉦と花籠が続く。平成21年には初盆の家は1軒で、庭入りは午後8時から9時過ぎまで行われた。

### 【事例7】 余上7集落の庭入り

宇佐市院内町余上7集落の庭入りは8月13日の夜に行われる。余上7集落とは余地区の上余・平原・栗山・滝貞・小平・大坪・岡の7集落が集まったもので、戸数は約140戸である。余神社横の運動公園で寄せ踊りとして、7集落合同の庭入りを行っている。合同で開催するようになって平成25年は39回目であるというから、昭和50年（1975）から寄せ踊りが始まったわけで、それまでは各集落ごとに初盆の家で庭入りをしており、過疎化によって合同の寄せ踊りになったという。この庭入りを主催しているのは余青年会で、18歳から50歳までの男性18名で構成されている。

運動公園の中央に2間四方の盆踊りの檜が建てられて、高さ約10mの鉦が檜の柱に縛りつけられている。運動公園の片側にはテントも仮設され、新仏の位牌と遺影を祀った祭壇が設けられている。平成25年の新仏は4名の方たちであった。

午後8時に庭入りを始める。運動公園の入口近くで行列を組んで入場する。行列の構成は下げ提灯を持った提灯持ち1名を先頭に、横笛7名、担ぎ棒に太鼓を吊って運ぶ太鼓持ち2名、太鼓打ち1名、鉦（ここではシンバル状の繞鉦）1名である。祭壇の前で「御詠歌」が歌われ、「しかしか」が読み上げられる。その後「バンバ踊り」が踊られてから、口説きによる盆踊りを踊る。9時30分に盆踊りも終わりとなる。檜の近くで入場の時と同じように行列を組み、「御詠歌」を歌った後、笛太鼓、鉦を鳴らしながら、運動公園の入口まで退場する。これを「ニワデ（庭出）」という。

### 【注】

注1：『安心院の庭入り』大分県文化財調査報告第55輯 大分県教育庁管理部文化課・昭和56年。

注2：『ふるさと佐田』安心院町心身すこやか事業推進委員会・昭和63年。

注3：小泊立也「時宗の展開」『大分県史中世篇1』大分県・昭和57年。

注4：『安心院町深見地区民俗調査報告書』別府大学民俗学研究会「かたつむりの会」昭和60年。

### 【参考文献】

折口信夫「髭籠の話」「ダイガクの研究」『古代研究』

「第5節盆の行事」『院内町誌』第7編民俗・院内町誌刊行会・昭和58年。